Osaka University Knowledge Archive

Title	『伊勢物語』の生成と享受
Author(s)	木下, 美佳
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58532
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【13】

氏　　名	木下美佳（きのした　みか）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４２８３　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**『伊勢物語』の生成と享受**
論文審査委員	（主査） 教　授　加藤　洋介 （副査） 教　授　飯倉　洋一　　教　授　岡島　昭浩

論文内容の要旨

本論文は、平安時代を代表する文学作品の一つである『伊勢物語』を対象として、生成と享受という二つの視座から、『伊勢物語』という作品の物語構造や虚構性、および享受の歴史における諸問題を考察し、『伊勢物語』の物語としての本質を解明しようとするものである。（400字詰原稿用紙換算約430枚）

前編「虚構の成立と物語構造」では、『伊勢物語』の諸章段において繰り返し用いられる語や実名で登場する人物を取り上げる。全一二五段から成る現在の『伊勢物語』には、それに先行する『古今和歌集』が章段形成の素材となっている場合や、主人公とされる在原業平が「昔男」と朧化される一方で、一部に実名で登場する人物がいる。それらを分析することによって、『伊勢物語』の虚構性や物語形成に際しての特徴を明らかにしようとする。第一章では、過去を回想し激しく「泣く」男の姿へと収斂させていくという共通する物語構成を持つ章段があることを示し、『古今和歌集』を素材とした『伊勢物語』が独自に付加させた主人公像であったとする。第二章では「宮仕へ」の語に注目し、「宮仕へ」によって恋の成就を妨げられるという、共通した顛末で終わる章段があることを指摘する。第三章は、「色好み」「つれなし」と冠される女が登場する一群の章段を取り上げ、『伊勢物語』には女に翻弄される男という物語構造を有する章段があることを示す。第四章では実名で登場する紀有常関係の章段を分析する。紀有常が主人公業平の岳父であることには触れず、

業平の「友だち」として登場させ、しかも政治的に零落したという史実とは異なる人物造型をしていることについて、それが『伊勢物語』の虚構であることを明らかにしている。第五章は章段末尾において清和天皇の名が明かされる六五・六九段などの分析を通して、『伊勢物語』には清和天皇の皇統や権威を妨げるという一面があることを指摘する。

後編「一条兼良の『伊勢物語』享受」は、室町時代を代表する碩学の一人である一条兼良の『伊勢物語愚見抄』によって、『伊勢物語』享受の一様相を具体的に示そうとする。『伊勢物語』注釈史において、『愚見抄』はそれ以前の鎌倉時代の「古注」との劃期をなし、後代の『伊勢物語』注釈書へと大きな影響を与えたとされる。第一章では「古注」を批判しながらも一部「古注」の影響下にあるとされる『愚見抄』の人物比定の方法について検討し、『愚見抄』の人物比定は『伊勢物語』の帝を清和天皇と見ることに起点があり、時には『古今和歌集』から判明する人名を採用しないなどの特色があることをいう。第二章では実証主義に貫かれているように見える『愚見抄』においても、史実と物語との差異が大きい場合には判断を保留したり、『伊勢物語』の側の虚構を是認するなど、史実一辺倒の実証によっているわけではないことを指摘する。第三章では、従来その位置づけが明確ではなかった刈谷市中央図書館蔵本を取り上げ、刈谷本の細字書入が兼良の書入を写したものであることを明らかにした上で、刈谷本が『愚見抄』の初稿本と再稿本の中間形態を留めていることを証する。第四章は新出資料である武井本『愚見抄』を取り上げ、これが兼良自筆であることを示すとともに、初稿本・再稿本の中間形態を留めつつも、前章の刈谷本とは異なる系統にあるという、『愚見抄』の成長過程が複雑な様相にあったことを推定する。

論文審査の結果の要旨

『伊勢物語』の成立や個々の章段に関する解釈、および享受史については、厖大な先行研究の蓄積がある。そうした状況下において、典拠となった『古今和歌集』との比較から、その改変箇所に『伊勢物語』の意図するところを析出しようとする試みは有効であり、分析の過程において従来とは異なる説得力ある解釈を提示することにも、幾つかの点において成功している。また一群の章段に共通する物語構成の具体相を明らかにし、実名が明かされることを手懸かりにして、『伊勢物語』の虚構性を浮かび上がらせたことも十分評価に値する。『伊勢物語愚見抄』に関する考察についても、一条兼良の注釈方法の一端を明らかにすることができたと評してよいであろう。刈谷中央図書館蔵本が『愚見抄』の初稿本・再稿本の中間形態を留め、兼良自筆本の面影をよく伝える伝本であることを明らかにしたことは、今後の研究においても参照されるべき必須の文献になると思われる。新出資料である兼良自筆本の紹介も、『愚見抄』の複雑な成立過程を考える上で今後の研究に資するところは大きいと思われる。

他方、前編と後編とで扱った問題が、相互にどう関わるのかについての具体的論及が見られない。『伊勢物語』の成立に関わる基幹章段を取り上げながら、個別の議論から従来の成立論へどのように展開させてゆくのかという視点が明確に示されていない。『伊勢物語愚見抄』の注釈方法についても、『愚見抄』全体に関する考察が望まれるところであるし、一条兼良の『源氏物語』注釈書である『花鳥余情』など、他の古典文学注釈との関わりにおいて論じていくことも必要であろう。論中で使用している研究上の術語の中に、一部適切でないものが見受けられるなどの問題点もある。

以上のような問題点を含むものの、本論文が『伊勢物語』の虚構性や物語形成に際しての特徴の一端を明らかにし、『伊勢物語愚見抄』をめぐる諸問題の解明を通して提示したことは、今後の研究に資するところも多くあり、高く評価できることと思われる。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。